

討論

森 それでは、討論のセッションに入っていきたいと思えます。今までの発表をもとに相互に討論していくとともに、フロアの皆さまから出していただいた質問も扱っていきたいと思えます。直接手を挙げて質問をいただくのは時間的に無理かと思えます。書いていただいた質問の範囲で進めていきたくと思えますので、ご了承ください。

指定討論の方々のお話の中にも、私の主題に関係する加害・被害の問題がありました。加害者、被害者、あるいは加害国、被害国という感覚には複雑な要素が含まれていると考えられます。私どもの調査研究では、まずは素朴な感覚として、日本が被害国であったと思うか、加害国であったと思うかを尋ねるところから出発して、その細かなニュアンスをインタビューで伺うことにしています。今後、インタビュを進めながら分析していきたいと思っています。

先ほどの中田さんのお話に、自分が子どもを死なせてしまった。子どもが亡くなったのは自分の責任であると考ええる方のお話がありました。これは戦場の戦いや敵国に対する行為という意味での加害・被害ではありません。しかし、自分のせいでも子どもが亡くなったという意味では、自分がある種の加害者である、死なせてしまった責任があると自分自身

を捉えて、それを重荷として背負って戦後を生きてこられている。そういう体験があるわけです。ですから、戦争という出来事には、こういう現象も含めて、個人レベルで、あるいは国のレベルで、さまざまなレベルで加害・被害という問題が出てきます。自分が被害者側であるという感情もあり、逆に自分のほうに責任があるという加害者側の感情があり、それが複雑に絡み合って、加害の体験が語れないという面もあるわけです。被害の体験は語れるけれども、加害に関しては一切口を閉ざしている帰還兵の方々もある。そのようなことを、このキーワードをもとに考えていけないかと考えています。

では、東谷さん、中田さん、指定討論者の方々のお話を受けて、補足がありましたらお願いいたします。

東谷 皆さん、お話をお聞きいただき、ありがとうございます。いろいろなところのご意見もあったと思いますけれども、討論の中で反映させていきたいと思えます。

野上さんが報告中に図を黒板に書かれていて、それが私の頭の中を整理するのにすごくよかったです、それを使って話そうかなと思っていたら、消えてしまいましたね。私自身は、みんなの話をこういう形で整理しているということをお示ししまして、この部分で議論すると明確にした上で話をしたいと思えます。

野上先生が書かれたものを大ざっぱに書きますと(図、(a)に記録であるとかアーカイブ、要するに体験者の話した言葉をどういうふうに記録化していくかという塊があります。

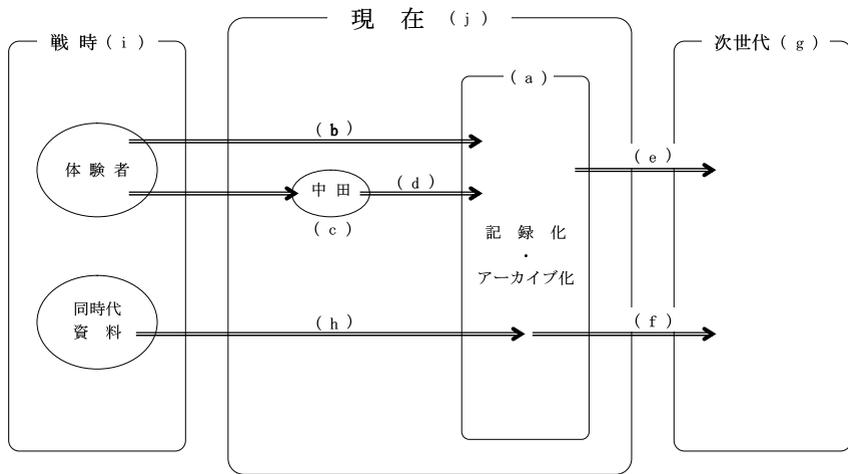


図 体験と記録化

(b) の過程には「思い」があるという整理をなさいました。この記録化された (a) を今度、次世代の人に対してどのように伝えていくかが重要だという話をされたと思います。

(a) に中田さんを書かれたんですが、中田さんはずっと体験を語り継いでいつている、語り部のような位置だという理解しています。そこで (c) に中田さんを書いておきます。野上さんの整理でおそらく抜けていたと思うのは、現在中田さんが語られていることをどう記録化していくかという (d) の点です。これが重要だと私自身は考えております。世の中が変わっていけば、いくら語り継いでいつても変わっていつてしまうおそれがあるので、早い段階で記録化する必要があるだろうと考えて、あえて中田さんを (c) に位置付けました。それともう一つ、私たち歴史学の立場からいきますと、体験者が生きていたときの同時代資料があります。これが現在を通して次世代まで引き継がれていくものもあることになります。

このように今日の話を整理した場合に、どういうふうな体験者の思いを残していくのかということの関わりで、おそらく (b) に中尾さんの話が来るのかなと。野上さんは (a) と (e) です。で、松本さんはまさに (d) の最前線で作られている。こういう整理でいいかなと思います。

じゃ、おまえはどこに位置するんだという話になるんですが、(h) なんです。歴史をやっている人間は、(g) の位置から (i) をどういうふうに取り取っていくのかという作業を将来やる。そのときに、もう (i) と (j) がない状態

かもしれない中で、(i)をどのように復元するのかという作業をやっていくのが歴史家です。

今回の試みは、通常歴史家は(b)、(d)ができない状態でどういうふうな(i)の全体図を描くかという作業をやっている。それを(b)、(d)の作業ができる状態で今何をやっておけば、体験者の思いというものがどのようにつながっていくか。それによって通常の歴史学では立ち入らないところを含めて組み立てていると理解していただければいいと思います。

ですから、中尾さんから、私たちは思いに対してすごく希薄に思っているかのような印象を受ける質問を受けたわけですが、全然そんなことはなくて、むしろ(b)、(d)の位置に私たちを置いた場合に、体験者との関係の中でどういう思いを伝えていかなければならないのかというふうなことに思いをいたすという、なかなか貴重な経験を今回させていただいたと理解しています。

そういう意味でいきますと、この資料と記録化された歴史が将来どういう手続をとるのかというシミュレーション(つまり、(e)と(f))をしてみたと言ってもいいかもしれません。(e)と(f)を想定しつつ体験者から、さらに聞き取りができる。あるいは補足がある。あるいは別の資料を発見するなどの作業ができる中で全体像が構築できる。そういう意味合いにとっていただければいいかなと思います。

また、二〇年前に聞き取りをしていれば、大人の視点の語りがとれたんじゃないか、それをどう考えるのだという質問

がありました。現在は(b)が無理な状態なんです。二〇年前の大人の思いをわれわれは聞くことができない。そうすると、(h)から組み立てなければ(i)に辿り着けないことになります。そういうことにならないためにも、今歴史家が聞き取りをすることが重要なんだというのが私どもの基本的なスタンスだとご理解いただければいいかなと思います。

幾つか細々した質問等々ありますし、また疑問点も出るかもしれませんが、こういつた位置づけの上に立って話をしているということをまずご理解いただいた上でお聞きいただければと思います。

森 ありがとうございます。東谷さんは、一つの疎開体験に取り組む中でその部分を扱われたわけですが、同様の形で取り組めるであろうテーマは実はまだまだ膨大に、しかも全国的にあるわけで、歴史として今何ができるのかということが問われてくる気もしますね。それについては、よければまた後ほど。

では中田さん、コメントを受けて何かありますか。

中田 野上先生に、憑依しているように言われて、どう表現しているのかわからないんですけども、今は思いを伝える人たちがいる。思いを伝えることができるわけです。その次には例えばNHKのBSが、兵士たちの証言をずっと集めています。空襲体験者の証言を集める。これはNHKにしかできないだろうとNHKの方がおっしゃっていました。私

たちにも、「いい人があったら紹介してほしい」と言ってきました。また、昭和館というのが東京にはあるんです。これは戦災遺族会という総務省から援助も出ている団体ですが、「私たちのところに空襲体験者の記録を残したいので、ご紹介いただきたい」と言われました。ですから、今本当にお金と人手のあるところでは記録もどんどん残していこうと積極的に取り組んでくださっているということは私自身ひしひしと感じています。それはとてもありがたいことだと思っています。

ですけれども、本当に私たちの世代が終わったとき、今私たちと一緒に体験者の方たちが動いてくださっているんですけども、その方たちがいなくなつたときに、果たしてこの思いがどの程度若い人たちに伝わるのかというのは、私にはすごく疑問なわけです。今現在、小学校に行くと、子どもたちは本当に真剣に、瞳をパッと開けて、学童疎開の話なんかは一生懸命聞いてくれます。「えっ、食べるもんがないっていう生活があったんや」というような彼らの驚き。「えっ、冷蔵庫がない。洗濯機がない。そんな生活があったんや」という子どもたちの姿を見ると、少しは聞いてもらえたかなと思えますけれども、本当に思いの部分は、私は母の思いをなんとか伝えたいという思いでみんなの前に立っていますけれども、映像化されたり、何かに収録されたものに果たしてどれだけその思いが伝わるのかというのは、とても……、と思つています。

歴史を勉強する先生方がそういうふうと考えてくださる。それは伝わらないかもしれないけれど、歴史家が伝えようと

してくださることがわかって、今日来て本当によかったなと。どれだけ伝わるかわからないけれども、伝えようとして学問、あるいは研究をしてくださる方たちがいると思うだけで、今体験者の人たちは勇気づけられると思います。だから、そうだ、僕もしゃべろう、私も話そうと思つてくださるだろうと思います。

森 ありがとうございます。指定討論者の方でも言い足りない部分とか、お互いに刺激を受けた部分があるかと思えます。

中尾 先ほどは、確かに中田さんのオーラが残っていて、泣きそうになりながら話して申し訳ありません。当時宝塚に移っていた母が、元は大阪の谷町に住んでいたんですけれども、大阪大空襲の時は大阪のほうの空が真っ赤で、武庫川に焼けただ物が漂ってきたと話してくれました。それを聞いた私は、まるで自分が、それを見たかのように受け止めている。では、その着物を着ていた人はどうなったんだろうと思つたときの子どもたちの気持ちは非常にリアルなんです。今も気になつている。「女学校のお友達はおそらく三分の一くらい亡くなつているのよ」と言う母に、それ以上聴く勇気が私にはなかった。おそらく、イギリスやオランダのほうから戦争体験を聴き始めたのは、自分から一定距離がある「敵側」だからです。自分の親族が広島でも何人か亡くなつているのを、私はどういふものかまだ詳しく聴いていないんです。そこを聴くと、私は海外の人に、「原爆のせいでおれたちは助かったんだ」と

言われたときに正気でいられるか、という感じがしてしまいます。

ですけれども、戦争体験の記録と継承はやはり全世界的に起こさなくてはいけないもので、各国・各民族の戦争体験は、残して初めて、突き合わせることもできる。今理解し合えない人間も、将来的に理解し合うことができるであろう。ということ、この図(55頁図参照)でいくと、「次世代」(g)はとても大事なんだけど、結局、戦争体験者(d)の記憶と記録(b)・(a)を口述でどれだけ残すかによって、戦争の全体像(i)・および(g)にとつての(i)も変わってしまうのではないかと。当然、歴史家が記録を残す苦心とか十分よくわかっているんですが、東谷さんたちほどわかっている方がそんなにいるわけではないのです。歴史家の中で戦争体験の口述を残そうとする方がマジョリティではない中で、戦争像を今、いかに残すかで将来変わっていくってしまう戦争の全体像なのですが、とにかく従来の方法でやっていけばいいんだよ、という方が多い。だからわざわざオーラルヒストリーの学会とかジャーナルとかパンフレット等をつくって、できるだけ豊かに記憶の森を生やしてもらって、その中から将来必要な記録を選んでいただくとしています。だが時間は限られている。その点、私は自分の中にも非常に焦りがあると思います。

もう一つ付け加えると、二〇年前の疎開を扱った大人の思い(b)を聞くのは無理だとおっしゃいましたが、生きていくかもしれない。疎開児童のプランニングを立てた九三歳の

人がいるかもしれない。実は戦前に教育も受けていて、老人ホームかどこかで、経験をあれこれしゃべっているかもしれない。政治家として残っているかもしれない。私たちは、そういう方が「もういない」と思い込んでしまう危険性がちよつとあります。それでさつき二〇年前の方の経験者の存命の可能性ということを申し上げてみたんですね。

具体的な例では、私の場合は、アフリカからビルマ戦線に行った若者たちのオーラルヒストリーがあります。植民地兵士と現在言いますが、よく皆さん、「アフリカは平均寿命も短いし、生き残っているわけないよ」「そんな大変すぎるよ」と言うんですが、確かにどんどん急速に数は減っていきますものの、これが意外と存命でいらつしやる。確かに奥地の森の中まで4WDの車で走りに走り回って会いに行かないといかないんですけれども、やはり生きてはいらつしやるんですね。八八歳、九一歳とかですが、かくしやくとしているし、かえってメディアにさらされていないだけに鮮やかな記憶を持っていらつしやる。字とか別の記録に触れていない分、さらに当時の記憶が正確とも言えます。

ですから、私はこの図に違和感は全くないんですけれども、今現在、残せる記憶・記録の収集をより一層充実させていただきたい。また、今日来場された皆さんが主体的に、中田さんなどの(d)にあたる方々が、記憶に残るおじさん、おばさん、お父さん、お母さんのことを書いておくだけでも、史料が増えるし、録音・録画しておくだけでも自分たちの戦争・戦場体験を将来の歴史家の分析は全然変わるであろうと思っ

ております。それは為政者の記録でもそうですし、子ども時代の戦争経験もそうです。アーカイブというのは生きている人たちが記憶／体験の森となります。それができるだけ茂っていくこと、それによって豊かな国になるようにと願っています。

まだこれから、いろいろな資料が出てくると思いますが、記憶としての口述史資料も、さらに利用できる側面を残せばいいのではということです。

東谷 ありがとうございます。戦争を体験した大人から（b）の作業をすることができないようなことを前提に話してしまつて、その前提はまずいなと感じました。

休憩時間のときに私に話しかけてくださった方がおられました、その方は「鉄道のことを調べましたか」と言われたんですね。要するに、私たちは現在の聞き取りの対象の方と、その方から聞いたことで点しか見ていなかったんですね。神戸と高梁しか見ていなかった。その方は、鉄道による移動に携わっていた方らしいんですね。その移動というところは、われわれには全然見えない状況でしたが、そういうことを話すことによって、情報が集まってくるわけなんです。それが非常に重要だと思います。どういう意図でこのようなことをわれわれがやっているのかを、何らかの形で発信していくことが非常に重要だと思います。おそらくそれは中尾さんと共通の認識でいけるのかなと思います。

そのことに関してなんですけれども、質問ペーパーで、「戦

争体験者がいなくなったときの研究はどうなるのか、戦争をどう描いていくのか」という質問が出ております。これは、そこで言うところの体験者の思いがない状態で歴史の研究をやっていくという話になっていくわけです。いま体験者の語られたことが、将来は一番重要な史料になっていく。私は江戸時代の専門で研究していますが、江戸時代の人が同時代に残した史料ももちろん重要な史料ですが、一〇〇年後にいろいろ資料を集めて、それをもう一度編集し直したのも、私たちは史料と考えます。あるいは、政治家が一線を退いた後に記している回想録のようなものも私たちは史料と感じます。

要するに、何らかの形で記録化をしていけば、それが史料になっていく可能性があるということなんです。ですから、戦争体験者がいなくなったから研究ができなくなるのではなくて、戦争体験者がいなくなっても史料は残り続けていく。その中で研究が進んでいく。では、今どうするかという話になります。戦争研究がなくなっていくわけはありません。私たちは（g）において非常に重要な役割を果たすかもしれない場にいるんだということを再度強調しておきたいと思えます。中田さんが（d）として体験を残していくのにつながっていると思いますので、ぜひお願いいたします。

森 ありがとうございます。

野上さんに移る前に、ちょっと話させてください。野上さんの議論に関係することとして、私は二点感じました。一つは、

家族には語れないという方があったことです。家族には語れないにもかかわらず、私たちのようにインタビュアーに訪れた者に、家族に一度も語ったことがない事実を語られる。家族という私的な中では、語るのが家族を変えてしまう。子どもには絶対言いたくない。けれども、この記憶は残しておきたい。そういう思いがあるということ調査から感じております。ですから、記憶を公のものにする。私的な世界にとどめるのではなく、公のものとして社会に位置づけることが重要であることも、こうした現象から見えてくるのではないかと思っただけです。

今は歴史のお話でしたので、残すことに力点が置かれる流れになっておりましたが、心理の立場から言いますと、戦争体験は、今起こっていることに影響しているんですね。戦争だけではなく、今世の中で起こっていることに直接影響している面を明らかにできればと感じています。野上先生の言われたように冷戦構造は一つの戦争です。でも、冷戦構造があったのは、その前に戦争があったからです。冷戦構造の後に現代の社会がありますけれども、戦争があったという事実が冷戦という構造として残った結果として、今の社会があるわけです。今のことを考えているという視点を、私は持つていきたいという気がします。割って入りましたが、野上さん、お願いします。

野上 森先生がおっしゃったことでだいたい言われちゃったなと思いがら聞いていたんですが、体験者が亡くなったら伝

わらないんじゃないかというのは、私は十分考えられると思うんです。そういう危惧があってもいいと思うんですよ。先ほど私が言いたかったのは、あの戦争の体験者ではないかもしれないけれども、現在という時代の体験者であり、この時代も戦争と無関係ではないとする。「自分たちは体験者じゃないから」と言うんじゃないかと、「別の戦争の体験者じゃないか」と常に思うことで、違う可能性が生まれてくるのではないかということです。

別の戦争ですよ。タイプとしては別の戦争だけれども、それによって「私は体験者じゃないから」と切っちゃう、あるいは「拝聴するだけ」ではなくて、そこは難しいんですけども、今の社会そして自分も戦争と無関係ではないと考える。「新しい戦争」の中で、私たちがそれをどう体験しているかと言えば、別に出征兵士として行くわけでもないわけですから、例えばテレビを見ていることは、その戦争とどう関与していることになるのかを考えるべきだということ。自分は観覧者で、客観者で無関係、テレビを見ているだけだよというのは現代の戦争じゃ通じないです。テレビを見ていることで何かいろいろ意見を持つたりすること自体も戦争の中に組み込まれている。逆に言えば、だからテレビで報道するんです。私たちは体験者じゃないというのは、あの戦争については体験者じゃない。けれども、別の種類の体験をしている、というふうな想像力をつくっていくことができないうのか私の考えです。それは冷戦を考えることとか、冷戦の中で日本の平和主義というものが置かれている位置とか、あるい

はテレビを見ていることと殺されたり死んだりしている戦場の風景との関係を想像すること。そういったことで、何かしらの当事者であることを私たちも考えなくてはいけない。考えることができるんじゃないかと思えます。江戸時代の一揆の史料は、自分も一揆を起こすような想像力を持ったときに、あるいは一揆を起こしたときに生き生きと読めてくるんじゃないかと思うんですね。私はそう思います。

それと、いただいた質問で、「安田武について、もう少し話してください」と聞かれています。彼はインテリですね。自分の感じた体験の意味や意義を言葉にできるんですね。それで、戦場について、すぐ隣の人が死んだ。あの一五センチほどの差が私の戦後、現在をつくっているとしたら、現在生きている人生って何なんだというのをずっと一冊くらいに書いています。その気持ちは、戦後社会がくみ取ってくれていないんじゃないかという疎外感を感じているらしくて、それをずっと言っている人です。だから、右でも左でも、新しい政治にまた巻き込まれるんじゃないか、使われるんじゃないかというのをずっと拒絶しようとしてきて、最後は死んだ友人だけが本当の気持ちをわかってくれているんだというので、本の最後では死んだ友人との会話が出てくるんですね。酒を飲み始めて、「まだそんなことを言っているのか」みたいなことを言っていて、本が終わる。つまり、社会にはわかってくれている人はいないんだ、死んだ友人だけなんだという思いを最後に言ってしまう人でした。

そう書いた一九六三年の『戦争体験』という本でだいぶすつ

きりしたらしくて、そのあとは市民と戦争体験の記録運動、それこそ空襲の記録活動に顔を出して、参加したり指導したりしていくような仕事をされていた人です。私は文庫になるべきだなと思っているんですが、絶版になって久しい本です。大きな図書館には入っているんじゃないかと思えます。ある一定の影響力は持った本だと私は思います。

森 では、松本さん。

松本 体験を記録して次の世代にという話ですが、私個人的には今きつちり体験を記録できているのかなというほうが非常に不安です。本当にちゃんと記録できているのか。聞いているのか。聞きやすい話だけを記録しているんじゃないかという不安はどこかにあります。本当に聞かないといけない体験は記録できていないんじゃないか。次の世代のことを考えるよりも、まず今生きて証言してくださる人の話をきつちり聞き取るべきだという気がしております。

この春まで、私は松江支局におったんですけれども、島根県というのはあまり直接の戦災の被害を受けていないところなんです。そこで自分が戦争と何を関わればいいのかと思っっているところを探したんですけれども、実は疎開児童をたくさん引き受けていたんです。それをお世話した方、もう九〇歳近い女性の方に話を聞きました。疎開児童のお世話の話は一分五分くらいで終わっただすけれども、その後、切々と自分のご主人のことを話し始められて、四時間くらい話を聞きました。

戦死公報が来たんだけど、それが信じられなくて、その方は終戦直後、日本国中走り回っておられたんです。自分の主人が最後、どう死んだのかを突き詰めるために。四年後、戦死公報が来て、実はそれが違って、ようやく五六年たつてわかったという話をずっとされていました。「こんな恥づかしい話、今までしたことないのよ」みたいな話で、そういう話がたぶんまだまだいっぱい転がっているとちゃうですね。自分は他人に話すほどのことじゃないという話、しかも空襲を受けて、すごく被害を受けた地域でなくても、身近な話として残されたままになっているんじゃないかなという気がします。まだまだ聞かないといけない話が残っているのかなと。

それと、今小学生、中学生になっている子どもは、おじいちゃん、おばあちゃんの世代がようやく戦争の体験があるという世代で、子どもにどう伝えていくかということが一番大切だなと思います。難しい話をするんじゃないかって、わかりやすい話。率直に、戦争というのはこんなに恐ろしい面があるんだぞというのを教えてやるにはどうしたらいいか。一つは、固有名詞をきっちり出した体験記を話してあげる。今自分が学校に通っているこの道で、実は六〇何年前にこういうふうな人が亡くなったんだよとか、いつも買い物に行くスーパーの辺りでこんな悲惨なことがあったんだよと。たまに遊びに行く遊園地に行く電車、阪急電車でもいいですけれども、途中でこんな機銃掃射にあつて、こんなにたくさんの方が死んでいるんだよというふうな、現実の場面と体験記を結びつけるようなものがあれば、子どもも実感できると思うんです。「いつ

も歩いている道で実はこんなことがあったんだよ。こんな経験をした人がいたんだよ」と言うことで伝えていけるようなものがあるんじゃないかなと。

人に任せるのは非常に申し訳ありませんが、学校などで広島、長崎、沖縄、東京大空襲を伝えることも必要でしょうけれども、その地域に根ざした地域の話、一人の方が亡くなつていても、それは戦争で亡くなったわけですから、自分の生活圏で実はこんな体験をした人がいたんだよということをもうちよつと大切にしていってほしいんじゃないか。それは体験者がなくなつても、その地域に残っていく話になるのではないかと最近ちよつと思つています。ですから、日本各地、地域によって戦争体験に差があるのではなくて、伝えるべきもの、残すべきものをきちつと選り分けていけば、たとえ直接の体験者が亡くなつても生きていくんじゃないかなという感想は持つております。

中尾 今のことで松本さんに質問したいんですけれども。皆さんのお話を伺つて一つ思ったのは、戦争体験者の方々は、聴いて語り残していくことによつて、簡単な意味ではなく、「癒されてそして、癒していきたい気持ち」があると思うんです。つまり、次の世代への平和への願いというのがどこかにあつて、皆さん語り続けているのではないか。戦争から続いてしまった暴力の連鎖みたいなものをどこかでアウフヘーベン（止揚）して、何か、次の「暴力によらないやり方」を見つけていくためにされているのではないか。でなければ、歴

史は繰り返してしまから。

これは、戦争の語り継ぎをするときに、考えるべき質問です。私は学生に二〇年教えてまいりまして、最初は戦争のことを直にやっていたわけではないんですけども、やっぱり惑うんです。つまり、彼らはやっとな受験勉強——当時は受験戦争ですね——を乗り越えてきたばかり。広島、長崎から来た子は平和教育でへとへとになっている。「また戦争かよ」みたいな子もいれば、全く知らない子もいる。だから、「おじいさんとおばあさんの聴き取りをしてみてね」と言う場合に、「聴けてよかった」と言う人もいれば、せっかく美しいと思っていた桜が、桜に戦争のむごたらしい死体の記憶が重なり怖いものになってしまったということにもなりかねない。つまり、何歳の段階で現実に教えていいか。感受性の強い子どもにどの段階で、聴いたむごたらしい話を再暴力化させずにおくか（——子どもは時に、周囲で行った「暴力」を、自分でも試そうとしますから——）、あるいはただ怖い話で、怖いから戦争は嫌というだけではなくて、戦争による暴力を乗り越えていく強さを持ちつつ、受け止めてもらえるか。そのあたりの年齢ないしはジェンダーやふさわしい時期については、暴力の検証をやっている方々に、あるいは戦争の侵入記憶や PTSD のことを森先生などに伺ってみたいと思います。

もう一つ、皆さん、歴史家の方々は、読む資料を最終的には残すと言われます。聞き取りで聞いた後、書き起こしたものを読むものにすることに積極的でないらっしゃるんですが、私がオーラルヒストリーという方法に触れてすごく面白かつ

たのは、テープで残しておいたり、ビデオで残しておいたりして聞くことです。この頃だんだん映像も歴史博物館とかに入ってきました。聞いてみると、テレビみたいにカットしてなくて、衝撃映像も入らないし、文書資料も入らないけれども、とても生き生きとしていて面白い。聴き・視る史料は語る人の動作も声も残す方法なのです。それをどのように今後発展させていくか。日本の技術なら、絵本の中の登場人物に触れれば、人がしゃべりだすようなこともできるんだろうと思います。原爆の絵でも、絵に実体験のお話がついていたら随分理解の度合いが違うだろうと思います。それを身近な戦争経験についても、アートとしてやってみてはどうか。アークカイブというものにも、日記や口述の書きおこしといった文書史料と共に声や映像が残っていれば、それはとても素晴らしい慰霊碑であり、戦死者へのたむけであり、私たちに対しての史料になる。音声資料とそれを書き起こした文字資料はちよつと質の違うものなので、どちらも貴重だと思っております。

森 予定の時間を少し過ぎておりますが、延びることは覚悟しておりました。皆さんからの質問に対してある程度すでに答えてくださった方もありますが、あらためて質問への答えに時間をとってから終わりにしたいと思います。

私から始めます。私の研究に対して、研究の最終的的は何かということを変更して問われている方がありました。これは、私も十分語り切れなかったところです。心理的な面から、

戦争体験がいかにも人に対してひどい影響を与えるか、マイナスの影響を与えるか、どれだけ害を及ぼすか、人生をつらなものにするかということを理解すればするほど、戦争はあつてはならないことが実感されるわけです。たぶんブッシュ大統領も、戦争が一人ずつの人生にこれだけの否定的な作用を及ぼすことを実感として感じたら、戦争は起こせないだろう、起こせなかったらと思うわけです。個人への作用を見ない感性があるから戦争を起こせると思うんですね。

ですから、心理学的な立場から個人の人生に対する戦争の影響の深さ、家族に対する影響の深さを何らかの形で整理して、明らかにしていけないか。それが結局は戦争を起こさないという決意への強いパワーにもなるのではないかと感じております。

では、ほかの方ががでしようか。いずれかの質問を取り上げて、これには答えておきたいということがありますか。どなたでも結構です。

考えておられる間に、もう一つ私への質問で、兵士の心理学といったものは世界的には結構あるんですが、「日本では戦争に行った兵士たちの心理学はどのように行なわれているか」と聞かれています。実際のところ非常に少ないのです。それは心理学の怠慢であろうと思います。だからこそ必要だと思えます。

去年放映されたNHKのドキュメンタリーの中で、ある病院の倉庫に、あまりにもひどい戦闘体験のために精神的に病んで、治療を受けていた方の診療記録が大量に残っているこ

とを取り上げていました。それらの体験と病が一体どういうものであったかを細かく見て、分析した人は誰もいない。もし取り組む方がいたら、分析の材料は相当あると思っております。

野上 今まで話してきた話とちよつとずれるんですけども、やはり空襲や疎開や子ども時代の戦争体験というのと、どうしても一九四四年、一九四五年に出来事が集中してしまうんですね。私はそれも大切だと思えますけれども、あと考えなくてはいけないのは、戦争に向かって行った社会です。「一五年戦争」という言い方をすれば、一九三〇年代はずっと戦争を考えていたわけです。真珠湾攻撃でいきなり始まってといふよりも、日中戦争をずっと続けていた。ちよつと考えなきやいけないのは、戦争の末期の二年に考察や記録化が集中しているので、ひどい目に遭ったという方向での想像力はすごく伝わるんですけども、それと同時に考えなければいけないのは、戦争に向かっていた社会に対する想像力ですね。一九四四年、一九四五年以前に戦争はずっとあって、一五年戦争みたいなことで言えば、それこそ戦争を日常にしていた人々がいた。それについて考えてもいい。考える必要があるかどうかと思うんです。今日の話とどう絡むかはちよつとわかりませんが。

森 疎開の体験の方々にも、実は疎開に行く前の生活とか、国民学校入学の頃の生活についてもお聞きしていかなければなら

ないと思います。今のところ疎開に焦点化されていますが、ほかの方々がでしょうか。

東谷 答えのほうをさせていただきます。二名の方から同じ趣旨の質問をいただいています。今日紹介した「学童疎開綴」が発見されなかった場合に、どういうふうな聞き取りの位置づけをしたのかという趣旨のご質問を二名の方からいただいております。

実は本当にたまたま今回見つかった「学童疎開綴」がなければ、ここまでの位置づけができなかったと考えています。本当にこれはまれな例になるかもしれないですね。ただ、だからと言って、聞き取りをやらなくていいのかという話ではないんです。聞き取りの体験は今言ったように、記録化、アーカイブ化されていく。そこから次の世代が何を見出すのかを考えるための資料になっていくということになります。

それと併せて言っておきたいのは、今回戦争体験者の方、疎開体験者の方と一緒にいろいろなお話をさせていただいたり、現地に行ったりして強く感じたことは、やはり戦争体験者の心とイコールになれないという限界があるんだということとは動かしようのない事実なんです。にもかかわらず、私が今回の取り組みを非常に熱心にやったり自分では思っているんですが、そこを突き動かしたものの話をしておきたいと思えます。

これは「学童疎開綴」に関わるわけですが、「学童疎開綴」が見つかったことよって、今回のレベルまで明らかになっ

た。見つからなかったらできなかつたと言いましたが、戦争中の史料は権力を持つている人間が隠してきたということを見逃してはならないですね。これは現在の私たちが、戦争というものを超えて、常に意識しておかなければならぬことなんです。

要するに、情報公開と考えた場合、現在の資料についても隠してしまえば、後に検証ができなくなってしまうという、現在のわれわれに対して警鐘を鳴らしている事例だと思えます。これは戦争に限りません。今日の新聞でも高速道路を無料にした場合、渋滞がどれくらいなくなるかという予測を隠していたと載っておりましたが、そのように情報操作ができてしまうと、やはり肝に銘じておく必要があります。

戦争体験者の方の心と一緒にはなれないんですが、戦争体験者の話を聞く中で、そこから私たちが次世代に伝えていかなければならぬことのヒントは得られたと考えています。そういう意味で、自分自身が熱心にやれる現代的課題の中で取り組ませていただいたと思っております。

中田 おっしゃった中に、「子どもたちにどの年齢でその体験を」というのがありました。私たちは小学校六年生とか中学二年生とかに呼ばれることが多いんですね。その中にもすごく個人差があって、私たちの話を聞いてだけで涙ぐんでしまう子、本当に泣き出す子、感想を述べなさいと先生に言われて、準備もしてきたはずなのに言葉にならない男の子がいっぱいしゃるわけですね。だから、私たちはどういう年齢でその話

にその子が向き合えるかと言われると、何十人も前にして同じ話をしているわけですから、いろいろな感受性の子がいて、「今日、なんかおばちゃん来たわ、学校に」ということで終わってしまいう子もいるし、私たちがお話ししているときから泣いている子もいます。大抵は先生が泣いていて、子どもは知らん顔しているんですけど、子どもが泣いているということもあるわけです。そんな子は原爆資料館に行ったら、怖くて眠れなくなつて父兄から文句が出る。「楽しい修学旅行のはずなのに、うちの子はそれ以後眠れなくなつた」という子もいるわけです。そうなると、どういうふうに伝えたらいいのかわかることはすごく難しいんですね。でも、やっぱり私たちが伝えたいと思うことを、みんな一緒に体験していただくしか、私たちには方法がないということ、無責任にみんな一緒に話をしていくんですけれども。

中尾 私も最初に広島島の原爆資料館に行ったときに帰つてきて夜驚症になつたりしましたが、それはそれで私は情操教育としては一種のイニシエーションとして、ありだと思つてすね。

でも、今は戦争経験を子どもに聞かせるのがメインですが、その情操教育の部分は大切であると同時に、知識のレベルで対応できる、ないしは社会構造あるいは歴史として見られる年齢層は他にかなりいる。実は皆さんの世代（五〇〜八〇歳代）とか、あるいはさっきの中田さんの話を聴いて泣いていた先生たち（二〇〜三〇歳代以上）レベルの方たちの方が

よく理解できる、聞くべき話が非常に多いんじゃないかと思つているんですね。そういう戦争体験を大人に聞かせる試みが本当はあつていいんじゃないかと思つています。

会場から頂いた質問については、①個人情報 ②映像記録の効果については社会学会や文化人類学、国際オーラルヒストリー学会では独自の倫理規定があり、日本の学会も現在検討中です。

この頃、独立行政法人に対する個人情報保護法があつて、これら証言の公開に対して事情が微妙になつてきたのですが、過度の部分は討論して変えていくべきだろうと思つています。

DVDで証言を見せる活動はこの頃どんどん進んでおります。それを読み取る、ある意味でメディア・リテラシーの力と一緒にすれば、文書資料と映像資料もより有効だろうというのが、方法論に対する私への質問の答えでございます。来週の週末も北海道で、アイヌの方々の語りを含めたオーラルヒストリー学会、口述で語るということで残していく人たちの集まりがあります。やり方も学んでいこうというパンフレットもだんだん出てきました。そういう形で、今後映像ないしは語りも文字と共に、残していければと思つています。そして、そういう情報や証言・記録を「過去の敵国」や被植民地を含め、各国で交換・照合しあえればと願っています。

森 ありがとうございます。いよいよ時間が迫つてまいりました。野上さん、松本さんから最後に一言ずつお願いします。

野上 一〇年以上、こういうことを社会的にやってきて、研究のための研究じゃなくて、こういう場がそうなんですけれども、そろそろ社会に還元しなきゃなと思って、何か本を書きたいと思っています。そのときはお手にとつてくださればと思います。

それと、戦争体験の語りをDVDで見せるという話がありました。今度DVDのどれを見たらいいのとか、先ほどデータベースの話もありましたけれども、結局どうDVDを見るかという話だと思っただけです。つまり、私たちより上の世代の人は、文字に慣れた世代だったと思うんですね。私たちは映像に慣れた世代ですので、映像がある意味で見やすいですけれども、今度は、どう見るか、あるいはどれから見るとかという問題があるわけです。そういう問題の立て方を社会との関係で考える、というのが私のテーマです。ほかの方とはまたちょっと違う切り口なわけですけれども、それぞれが分担していけばいいと思います。

松本 子どもにどう伝えるかという話ですけれども、私、個人的に言いますと、ちゃんと伝えるべきだと思います。泣こうがわめこうがちゃんと。その時代の子どもたちはそういう体験をしたわけですから、相手の個人差が、というよりも、まずきつちりとあった現実を伝えてあげるべきです。あとは、大人がそれをどうフォローしてやるかという問題だと思います。その辺はあまり斟酌する必要が、私は個人的にはないと思います。ちゃんと伝えるべきだと思います。変にオブラー

トに包んだり、変に遠慮する必要は全くないと思います。

あとは映像ですけれども、私は申し訳ないですが、二〇年以上活字の仕事しかしておりませんので、活字の力を信じております。活字で伝えられないものが映像で伝えられるわけではないという信念を持っておりますので、映像もいいと思いますが、まず活字できつちりと残す。いかに残していくか。後世の人がこの活字を読んで、いかに感情が揺さぶられるかということがまず第一で、映像は二次的に置いていってもらいたいんじゃないか。まず活字できちんと残すことが大切ではないかと思っています。以上です。

森 ありがとうございます。時間が大幅に過ぎてしまいましたが、お疲れかと思えます。戦争のことを語り始めると、どこまでも語り続けなければならぬ問題ですので、これを機会にさらに伝え続けることとして、今日の会はここで締めさせていただきます。ありがとうございます。

司会 指定討論者の皆様、シンポジストの皆様、ありがとうございます。最後に森所長より皆様にご挨拶させていただきます。

森 今日は壇上に上がってくださいました先生方も、来てくださった方々も本当にありがとうございます。これからもわれわれのプロジェクトに関心を持っていただいで、何らかの形で協力していただける方は、ご協力よろしく願いました。

と思います。さまざまなお立場からの戦争に関する関心が広がっていくことを願っております。

皆様の中で、この調査のアンケートに参加してもいいという方がおられましたら、今日の資料の中に「アンケート調査に協力いたします」と書かれた紙を入れておりますので、連絡先を記入の上提出いただければ、送付させていただきます。今のところ「昭和六年生まれから」となっておりますが、上の世代の方も協力いただける方がありましたらよろしくお願います。

それから、インタビュー調査は、今参加を了承いただいている方に順次行なっていくことになっております。その後インタビュ어의対象を広げることができかもしれませんが、今のところはじめての方はアンケート調査でお願いしたいと思います。

司会 これを持ちまして、甲南大学人間科学研究所の危機と臨床の知、第九回公開シンポジウム「戦争体験の記憶と語り」を終了させていただきます。

〈終了〉